

暉峻淑子著

豊かさとは何か



暉峻淑子著

豊かさとは何か

暉峻淑子

1928年大阪府に生まれる
1963年法政大学大学院博士課程修了
専攻—生活経済学
現在—埼玉大学教授
著書—「生活経済論」(時潮社)
「ゆとりの経済」(東洋経済新報社)
「公共サービスと国民生活」(編著,
産業統計研究社)
「サンタクロースってほんとに
いるの?」(福音館書店)ほか

豊かさとは何か

岩波新書(新赤版) 85

1989年9月20日 第1刷発行 ©

定価 550 円
(本体534円)

著 者 暉 峻 淑 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-430085-1

目

次

一 金持ちの国・日本 1

カネとモノがあふれる国／第三世界の姿は四十年前の日本／豊かさに夢中になった日本人／表面だけの豊かさ——余裕と豊かさの喪失／時間を奪いとられた生活／豊かさへの道を踏みま
ちがえた日本

二 西ドイツから日本を見る 17

資本主義国の中でも特殊な日本／もはやいいわけは通用しない
／空港から落ちついた美しい町へ／森や木や動物と共にゆった
りと生きる人びと／問題意識が豊かな学生たち／生活基盤の充
実が豊かさを保障／個性的で、のびのびとした教育／自己責任
の前に社会的責任／生徒も教師も自由／見守るが強制はしない
——「非行」少年少女の教育／一人ひとりを家庭的に教える
——特別クラス／個室制で活気ある老人ホーム／ゆきとどいた
在宅看護とホーム・ヘルプ／安くて高水準で個性的な住宅／土
地の私権にはきびしい制限／四万以上の自助グループが活躍／
心配のない、老人たちの生活／安い交通費——社会的共通資本

の威力／金持ちで貧乏な国——西ドイツから見た日本／他国を知ることは自国を知ること

三 豊かなのか貧しいのか……………67

日本の「豊かさ」への疑問／「豊かさ」って何だろう——女たちの生活実感／高校生たちの疑問と不安／動物や植物とともに命を大切に生きて生きる——地球的豊かさ／地球的豊かさ感と物量的豊かさ感への分裂／豊かさへの疑問と、ガルブレイスの『豊かな社会』／市場経済信仰から所得の再分配へ／かきたてられる欲望から自主的に決定される欲望へ／豊かな社会とは？——ガルブレイスの結論／個人生活の側から豊かさを測る——生活水準論／貧困調査から始まった生計調査／日本の生計調査の曙／多角的な視点をもつ現代の生活水準論

四 ゆとりをいけにえにした豊かさ……………105

ゆとりを生み出すもの——社会保障と自由時間／労働時間も通勤時間も長い日本／全国建設関連労協の「健康と生活に関する

調査」／残業・休日出勤・徹夜勤務／有給休暇・忙しさ・イライラ・やりがい／残業の影響がとくに大きい睡眠と食事／帰宅時刻と就寝時刻／人間らしい生活をするには残業は月十時間限度／精神的一体感の喪失——危機感を抱く妻たち／回復困難な疲労、常用される薬／拒否しにくい残業／本人と家族は残業をどう考えているのか／すべての産業に共通する労働実態／人間の本性に反する夜勤・深夜労働／広がるストレス性疾患と過労死／何よりも合理化と効率化を優先する国／「八時間労働」の真の意味／時間短縮を伴わない男女雇用平等は差別を生む／ストレスにさらされる母性／機械化によって貧しくなった労働／時間短縮が「労働のあり方」を変えていく第一歩

五 貧しい労働の果実

労働者の暮らしはどうなっているのか——総務庁の家計調査から／ひろがる新しい貧富の格差／日本人の貯蓄好き——それも土地暴騰の一因／住宅は生活の容れもの／「個人の自己責任」——ないに等しい日本の住宅政策／「住宅は人格の一部」——住宅に手厚い助成のある国の考え方／持てる者と持たざる者と

の格差／全国に波及する地価の騰貴／可処分所得を上回る住宅ローンの返済額——東京のクレージーな現象／都市住宅を自分たちの手で——コープ住宅の運動／カネの豊かさが住の豊かさを亡ぼした／個人の自由を支えるもの——共同体的な土台／経済の活力か人間の活力か／弱者をも抱えこむ「共存の原則」／社会保障を削減してきた日本の保守政治／大幅に切り下げられた年金と老人医療費／介護に疲れる家族、介護の手を抜く老人ホーム／貧しい人を見殺しにする国民健康保険／ますますきびしくなる生活保護の受給制限／同情心や社会的公正感を葬り去ることはできない

六 豊かさとは何か

共通の生活基盤を充実させる／二つの自然を統一して生きる／労働時間を短縮し、労働のあり方を変える／本当の豊かさへの転換に向けて

あとがき

一 金持ちの国・日本

カネとモノがあふれる国

日本は豊かな国である、という。

一九八八年、日本人一人あたりのGNPは、名目で三百二万六千円（二万三千六百二十ドル）。すでに、一九八六年以来、アメリカを追いこしている。

日本の国土面積は、アメリカの二十五分の一しかないのに、地価の総額は、アメリカ全土の四倍以上（一九八七年末、千六百三十七兆円）であるという。

日本人の個人貯蓄合計は約五百八十兆円。一年間のGNPをはるかに超える。

法人企業の交際費は、年間約四兆二千億円（一九八七年、国税庁しらべ）、一日に百十五億円の支出である。

こんな数字をいちいち持ち出すまでもない。店頭にあふれるかずかずの商品。セリヌもバーバリーも、ごくふつうに、色とりどりの服装をした若者たち。毎日の食事と残飯の山。捨てても捨てても、すぐいっぱいになる屑かご。粗大ゴミ捨て場の家具や電気製品。

海外旅行の日本人は空港にあふれ、旅行だけではこと足りずに、海外の不動産や美術品を買いあさる。若者たちの結婚費用の平均が七百万円以上とか、政治家の一夜のパーティーに何十億円もの政治資金が集まる、などときけば、日本の社会は上から下まで金あまり現象であふれ

かえっているようにみえる。

そんな日常の経験を通して、私たちは、いやでも日本が金持ちの国であることを知らされている。

第三世界の姿は四十年前の日本

もし、日本の豊かさを意識しない人がいたとしても、第三世界の飢えに苦しむ人びとの姿をみると、ハッとして身の周りの豊かさを見つめなおすにちがいない。

だが、第三世界で飢えや病気に苦しんでいる人びとの姿は、じつは、四十年前の、日本人の姿でもあったのだ。

いま、まだ日本人の五分の一の人は、飢えに苦しんだ戦前の記憶を持っている人たちである。一九四六年、当時の鉱工業生産は、一九三六年にくらべて、その二八・九%しかなく、国民所得は五七・一%に、都市の消費水準は五五・四%にまで落ちこんでいた。^{*}

コメは敗戦の四年前（一九四一年）から、衣料は一九四二年から、キップによる配給制になったが、キップはあっても現物の配給はなく、芋や雑穀、大豆カスの配給があれば幸せな方で、それさえも運配・欠配が重なった。

一九四五年、世田谷区で行われた日本生活問題研究所の調査によれば、当時、配給量は七四

三キロカロリー。タンパク質は二〇・六グラム（一九八五年、日本人一日あたりカロリー摂取量は二〇八八キロカロリー、タンパク質摂取量は七九・〇グラム）であったという（石川弘義著『欲望の戦後史』広済堂出版、一九八八）。

住宅事情は、焼トタンと焼材木のもの五〇・六％、焼トタンと古材木のもの、四九・二％、一間のみ、八四・八％となっている。

また、『日本食生活史年表』（西東秋男著、楽遊書房、一九八三）をみると、一九四三年には木炭や薪も配給制となり、コメの代わりにじゃがいもが配給されている。学生食堂は閉鎖。一九四四年四月、『週刊毎日』には「食べられるものの色々」という記事に、「孫太郎虫、ざざ虫（カワゲラの幼虫）、クロスズメバチの幼虫と蛹、ゲンゴロウ虫（羽、足、頭をもぎとり、腹だけしように煎りにして煮つける）」などとある。

敗戦の年、餓死者が続出し、上野駅で一日に六人。十二月には上野地下道の浮浪者二千五百人が一斉収容されている。コメの供出実績は予定の二三％しかなく、野菜の入荷量は計画の三分の一しかなかったから、一九四六年六月の東京の主食遅配は一八・九日となり、農林省は一月に十日の食糧休暇を決定した。

一九四六年六月十日に共同通信がおこなった調査によると、一日に一度だけ食べている者七一％、一度もたべない者一五％となっている。一九四七年七月、主食の遅配、全国平均二十日

(東京二五・八日)。十月には食糧をやミ(非合法)で手に入れることを拒否していた東京地裁の山口忠良判事が栄養失調で死亡した。東京中央郵便局では大量欠勤。登校時を狙って園児、児童から弁当を奪う少年が激増した。

いま私たちが、胸を衝かれるような思いでみる難民の姿は、昨日の日本の姿でもあったのである。駅にはまっ黒に汚れ、ハダシでボロをまとった子どもたちや外地からの引き揚げ者がむらがり、栄養失調や伝染病で死んでいく人も少なくなかった。

* 総務庁統計局監修『日本長期統計総覧2』(日本統計協会、一九八八)によれば、一九八〇年を一〇〇として一九四六年の鉱工業生産指数は、産業総合で一・七であり、一九三六年は六・一である。

豊かさに夢中になった日本人

それらの記憶を持つ日本人が、乞食王子の物語のように、突如としてこんどは未曾有の栄華と豊かさの中にいるのである。日本人の多くがモノとカネの豊かさに夢中になるのも、無理からぬことなのかもしれない。

エコノミック・アニマルと言われたり、金をためることだけを人生や社会の唯一の目的にしている、と笑われたりしても、戦前の貧しさや戦争中の飢えを知る者にとっては、窮乏は恐怖である。そして、そんな経験を持つ祖父母や親に育てられたのが、現役の世代であるから、そ

ノとカネにしがみつき、すべてを金銭で評価する時代精神から脱却することは、なおまだむずかしいのかもしれない。

戦後四十年のあいだに、勤勉な国民性によって、よくぞここまで豊かになったことよ、と政治家も財界も自画自讃する。

たしかに敗戦の廃墟から、生きることに向かって国民がたちあがったとき、国民の胸の中には「忠君愛国」の精神主義や「天皇の絶対的権威」にひっぱりまわされるのは、もうコリゴリ、という思いがあったにちがいない。命にとっては、哲学よりも、モノとカネが大事であることは、敗戦国民の、体験から生じた必然的合意であった。

なぜなら精神主義による判断は、しばしば独善的な誤ちに向かつて暴走するが、モノとカネをいくら作り出したか、という金銭的価値判断は、理屈ぬきに、誰の目にも合理的な客観性を持つてゐるからである。そしてもちろん、貧しさにとつて、モノとカネは、健康と幸せのための不可欠の条件でもあった。

戦力の放棄、財閥の解体、農地改革、労働組合の合法化による経済の民主化が、経済の高成長の原動力になったことは、言うまでもない。そこでは、民主化と経済成長は、表裏の関係にあった。

そしていまでは、「経済大国」という言葉をきかない日はないほどになった。しかし、カネ

とモノをひけらかして金持ちぶりを自慢しつづけるということの中に、じつはそれしか自慢するものがない社会の貧しさを、私たちは自覚せざるをえなくなっているのではないだろうか。日本人は、すべてを経済に特化するために、他のすべてを捨ててきたからである。

たとえば、「あなたの国で誇りに思うことは？」ときかれたときスウェーデンの若者の六二％が「福祉」と答えている（日本で福祉と答えたのは六％）。西ドイツでは、経済の発展と同時に、国民の住宅や都市環境が美しく整備され、社会資本や社会保障制度の充実とともに、文化的事業に対してもゆきとどいた公的補助が行われている。

表面だけの豊かさ——余裕と思いやりの喪失

日本の豊かさが、じつは根のない表面的な豊かさにすぎず、板子一枚下には地獄が口を開けており、砂上の楼閣のようなもろさに支えられたぜいたくが崩れ去る予感を、多くの日本人が、心中ひそかにかんじているのではないかと思われてならない。

たとえば、もし寝たきり老人になったら……、もし収入が減って住宅ローンが払えなくなったら……、もし幼い子を抱えて夫と離死別したら……、などと。

いざとなっても、誰からも助けてもらえない不安と、ひとなみから排除されてしまう不安とで、強迫神経症のように、はてしない飢餓感に追われる日本人は、もっともっととカネを貯め

つづけているのではないかと、私には思われてならない。

企業が投資のために投資をするのは、限らない自己増殖をつづけることが目的である資本にとっては、当然の行為とも言えよう。

しかし、人間の生活にとってのカネとモノは、本来、生活に必要なだけあればよいのである。人生にとってカネは手段であり目的ではない。家族や愛する者との健康で楽しい生活。趣味、生きがいのある仕事。人生の充実感、無目的な友情、自然とともにある安らぎ。それらが充たされれば、限りなく財テクやマネーゲームに目を血走らせる必要はないはずなのだ。資本の求める目的と、生活の求める目的は違っていて当りまえである。それなのに、企業の投資熱に感染したかのように、株の売り買いや、リゾート地やワンルーム・マンションへの投資、あげくのはては教育も投資、つきあいも投資、お中元やお歳暮や冠婚葬祭も投資、と計算するのが社会の風潮になってしまっているのはなぜか。子どもたちまで、損することには手を出さず、弱者をかばうこともしない。

豊かさが必然的にもたらすはずの落ちついた安堵の情感や人生を味わうゆとりは、どこへいつてしまったのだろう。本能的に自然に湧き出るはずの他者への思いやりや共感などは、金持ち日本の社会から日に日に姿を消していくように思えてならない。

一九八八年元旦の朝日新聞に、堀田善衛氏がスペインから次のような文章を寄せていた。

しかし、金がもうかることと、人の生涯においての仕合わせの感とは、いったい本当に、そんなにも密接な関係のあるものなのであろうか。……いずれが仕合わせのある社会構成であるかは、これもいわくいい難い問題である。

いずれが、余裕のある、思いやりのある人間を作り出すかによって、社会的安定の度合いというものが判断され、それによって、その社会に生きることの仕合わせというものが測定されるものであろうと思われる。

堀田氏は、日本よりはるかにGNPの低いスペインの方が社会的に豊かだと言うのである。

日本が現在のようになってしまった原因を、どの時代にもある人間の貪欲や利己心という心の問題だと考える人もいるにちがいない。しかし、そう考えるには、日本の社会には、いま、あまりに大きな問題がありすぎるように思われる。マスコミをにぎわす政治家や官僚の汚職は、ひとつの象徴であるにすぎない。

たしかに、どんな社会にも、貪欲な人とそうでない人がいる。しかしある種の社会では、より多くの人がゆとりを失い、バランスのとれた判断を失うこともまた事実である。

たとえば戦争のときの、人びとの心理や判断は、しばしば、平常の社会では考えられないほど異常であった。最近では、アメリカのレーガンの時代を、人種差別、少数者の排除、不寛容、暴力の助長時代だと特徴づける人が多い。